

論文内容要旨

Development of an assessment tool for the
transition of Japanese primiparas becoming
mothers: Reliability and validity

(日本人初産婦が親になっていく移行の
アセスメントツールの開発：信頼性と妥当性)

Midwifery,115:103485,2022.

主指導教員：岡村 仁 教授

(医系科学研究科 精神機能制御科学)

副指導教員：川崎 裕美 教授

(医系科学研究科 地域・学校看護開発学)

副指導教員：田邊 和照 教授

(医系科学研究科 周手術期・クリティカルケア開発学)

加藤 陽子

(医歯薬保健学研究科 保健学専攻)

【緒言】

移行は自己の再定義のいくつかの段階と関連して起こる 2 つの比較的安定した状態の間の変化の時期とされ、健全に移行が経過すれば主観的な安寧や熟達感を持ち、周囲の人との良い関係性が築けると言われている。初産婦が母親になっていくという移行は、そのなかでも注目を受けている事柄である。母親になっていくという移行が健全に経過することを阻害する要因として、わが国の伝統的母親役割がある。伝統的母親役割は、子どもへの献身による母親の犠牲は尊いとされ、それによって、母親は抑制された状況におかれるとされる。このような状況において、母親になっていく移行が健全に進むための支援を行うには、まず母親になっていく移行がどのように進んでいるのかを捉えることが必要となる。母親になっていく移行を捉えるには、流動的に変化しうる母親としての役割のある生活に移行していくあるがままの状態を評価する必要があるが、これまでそのような評価尺度はなかった。そこで本研究は、初産婦が母親になっていくという移行を捉える尺度を開発し、その信頼性と妥当性の検証を行うことを目的とした。

【方法】

産後 3～6 か月の初産婦を対象に実施した、母親役割のある生活に移行していくことについての半構造的インタビューから得られた項目について、内容妥当性の検討として専門家との意見交換を行い、81 項目、5 件法の質問紙を作成した。本調査に先立ち、パイロットスタディとして、Web 画面から回答を入力する自記式質問紙調査を実施した。対象は、日本人初産婦 86 名とし、選択基準を婦既婚、子どもが早産児、低出生体重児、多胎児でない者とした。分析方法あたっては、記述統計、因子の抽出として探索的因子分析を行った。因子の抽出における内容妥当性の検討として、探索的因子分析の結果を踏まえ専門家との意見交換を行った。結果、5 因子からなる 57 項目が抽出され、これを本調査で使用する項目とした。

本調査では、Web 画面から回答を入力する自記式質問紙調査を実施した。対象の選択基準は、パイロットスタディと同様であった。調査項目は、属性、57 項目の尺度原案、及び併存妥当性検討のための養育意識・行動尺度、母親役割の自信尺度及び母親であることの満足度尺度で構成した。分析では、データの特徴を把握するための記述統計、天井・床効果の検討を行い、信頼性検討のために I-T 相関分析、Cronbach の α 係数を算出した。妥当性の検討として、探索的因子分析と確認的因子分析を行い、さらに「母親役割の自信尺度」「母親であることの満足度尺度」「養育意識・行動尺度」との相関を評価した。また、内容妥当性の検証のため、因子抽出過程及び抽出した結果について専門家との意見交換を行った。

【結果】

本調査の分析対象は 395 名となった。探索的因子分析を行い共通性のある因子負荷量を算出するとともに、内容妥当性を検討した結果、5 因子からなる 30 項目（第 I 因子 10 項目、第 II 因子 8 項目、第 III 因子 6 項目、第 IV 因子 3 項目、第 V 因子 3 項目）が抽出された。第 I 因子は、自分の子育てへの力不足や自信のなさ、母親としての役割遂行が十分に発揮できていないことに関する項目で構成され「母親役割の不充足感」、第 II 因子は、自分にとっての子育てをしている中での子どもの存在、子どもとの生活に関する項目で構成され「私にとっての子育て」、第 III 因

子は、子どもからの要求の理解や母親である振る舞いになってきた認識に関する項目で構成され「母親役割遂行の熟達感」、第Ⅳ因子は、夫又はパートナーの父親役割遂行への思いや親としての関係性に関する項目で構成され「子育てにおけるパートナーとの関係」、第Ⅴ因子は確立した子育てでなく、自分の子育てになることに関する項目で構成され「自分なりの子育て観の芽生え」と命名した。

Cronbach の α 係数は、第Ⅰ因子 0.871、第Ⅱ因子 0.870、第Ⅲ因子 0.751、第Ⅳ因子 0.767、第Ⅴ因子 0.648 であり、適合度指数は、CFI=0.838、GFI=0.821、AGFI=0.789、RMSEA=0.07 であった。本尺度の合計点と3つの各尺度得点との相関は、母親役割の自信尺度で $r=0.394$ ($p<0.01$)、母親であることの満足度尺度で $r=0.569$ ($p<0.01$)、養育意識・行動尺度で $r=-0.459$ ($p<0.01$) であった。

【考察】

各因子の Cronbach の α 係数は、第Ⅴ因子を除いた下位因子では 0.70 を超え、第Ⅴ因子においては項目間相関があり、本尺度は一定程度の信頼性があることが示された。外部基準と本尺度との間にはすべて有意な相関が認められ、併存妥当性が確認された。また、確認的因子分析を使用したモデルの適合度は、GFI、AGFI、CFI とも 0.789 から 0.838 で、 $GFI>AGFI$ であったことから、概ねモデルの適合性も示されたといえる。さらに、母集団の乖離度における指標である RMSEA が 0.073 であったことから、母集団におけるモデルの良さは許容範囲内であることが示された。

本尺度は、母親になっていくという移行を具現化した 5 因子で構成されており、5 因子のどの部分が移行しているのかを捉えることができることから、個々の母親の状況に合う支援の検討に際し、有用であることが示唆された。本尺度の更なる実用化に向けては、各因子間の関連、5 因子及び全体得点のバランスの意味、尺度の使用時期などを検討していくことが必要と思われる。